

山間の秋夜

真山民

夜色秋光共一闌
飽まで風露收め脾肝入

虚檐立ち尽す梧桐の影
絡緯数声山月寒し

【作者】真山民（一二七四年頃）中国，宋末の詩人。経歴，姓名とも不詳で，山民と自称し，南宋の学者真徳秀の子孫では

ないかと思われるところから，真山民と呼びならわされている。戦乱を避け，おもに江南を遊歴中につくった平明な詩が，人々に好まれ，伝誦された。詩集『真山民集』。

【語釈】 *一 闌：闌は欄に同じ，一つの欄干 *脾 肝：脾臓と肝臓 腹の中 *虚 檐：誰もいない軒先

*絡 緯：こおろぎ

【通釈】 更けてゆく秋の夜色と月光が欄干に満ち，心ゆくまで夜気を腹の底まで一ぱいにすいこむ。

誰も居ない軒端（のきば）の梧桐の影の辺りにしばらく立っていると，何処からともなくこおろぎの鳴く声が聞こえてくる。月は山の端（は）にかかりひとしお寒気（かんき）を覚えるのであった。